

---

# 恋の詩 第四小節三番

成宮春季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋の詩 第四小節三番

### 【Nコード】

N5439F

### 【作者名】

成宮春季

### 【あらすじ】

超モテモテの少女・羽鳥綾菜が転校生・水嶋悠太に初恋をした！  
？でも、悠太には秘密が…

## 第一話・始まりの時

「おはよう、明菜ちゃんに由愛ちゃん。」

可愛い制服で 髪は肩ぐらいのショートカット。

可愛い ハートのついたカチューシャをしている

優しそうな目の女の子                      これがこの恋の詩の主人公。

はとりあやな  
羽鳥綾菜だ。

「あら、綾菜ちゃん。また 男子に囲まれて。」

この元気なポニーテールで 活発そうな 背の高い女の子。

くろしなみあきな  
黒崎明菜 だ。

「綾菜、今日水曜は得に綾菜への告白が多い日よ。」

カタカタパソコンをならして髪は黒くてロング。

すこしカールしている髪。

この子が あきたゆめ 秋田由愛だ。

「もお！ 明菜ちゃんも由愛ちゃんも あたしをからかってえ！」

たったたつたつと男の子が綾菜に近づく。

「羽鳥さん！ ボク、羽鳥さんのことが好きなんです！ 付き合ってください！」

90度頭を下げた男の子は綾菜に言う。

「ごめんね。 浅田君。 お友達から始めませんか？」

「は……………羽鳥さん、ボクの名前覚えてるの？」

「うん！ 1-E組 浅田健一郎あさだけんいちろうくんでしょ？」

「なんて 優しいんだ！羽鳥さんは！」

浅田は意識が天に上っていった。

「あーいう 綾菜の天然が男子をノックアウトだね。」

「そうね、明菜、 私達には出来ないわ。」

「二人ともお！」

「あーら怖い。 早く退散しましょう！」

「もお！ 明菜ちゃん！」

予想していなかったよね。

私達の友情はどんなにもろかったのだろうか。

私達はずっとこのまま

そう信じていた。

大切な人がいなくなって

人生がめっちゃめっちゃになるなんて

誰も考えてもいなかったでしょう。

幸せだったね、あのころは。

あの人のおかげで大切なものに気づき

あの人のおかげで私は変わり

あの人のおかげで傷ついた。

そんな詩が今…静かに

音を立てて始まるんだ。

「2 - Aに転校生を紹介します。おいで！」

そこには 柔らかい瞳 黒く首元まである髪。

でもキザっぱくはなく。

そのコからは 薄い青リンゴの匂いがただよう。

「俺、水嶋悠太。みずしまゆうた よろしくな！」

そこから 詩が生まれだす。

そして私達の歯車は

今静かに回ってく…

## 第一話・始まりの時（後書き）

初めまして、成宮春季です。

私の小説サイト（<http://love.dj/xpoplov>  
ex/）で連載している小説

恋の詩を、このたび連載することになりました！！

切なくてほろ苦いストーリーになっております。

よければ綾菜の恋がどうなるか

最後までお付き合いください^^\*

11月22日

作者\*成宮春季



## 第二話・好きナ人

わぁ…悠太くんって、かっこいいな。

すごいな、モテそうだな。

ぼけーっと半分眠りかけている頭でそう考えていた綾菜。

悠太が自分にとって

どんな人になるかも知らずに…

「水嶋君は…そうだな…」

その小さく呟いた声は担任の山田やまだはつき葉月先生だった。

しっかりしたその声。

男子生徒に告白されたこともあると自慢していた先生。

葉月先生は 悠太を見るたびに顔を赤くした。

25の葉月先生をも 引き付ける 悠太であった(汗)

「山田先生！」

急に手を挙げる明菜。

「どうしたの？黒崎さん。」

驚く葉月先生。

「羽鳥さんの隣 空いてますよ。」

ニヤニヤしながら言う明菜。

きや ! もお! 一人がよかったのに……

つつい 隣が居ると喋っちゃうからいやなのに……

「そうね。」

葉月先生も乗らないでよお!

「じゃあ、水嶋君はあのハートのカチューシャの子の隣ね。」

「はい。」

悠太は歩いていった。

ドキドキドキ

綾菜はドキドキと心臓の鼓動が聞こえた気がした。

「横、いいかな。」

「へ！？ あ…うん。」

「俺、水嶋 悠太。 君は？」

「え！？あ…あたし羽鳥 綾菜ああ！」

驚きと焦りが混じって変な声が出た綾菜。

「どどどどど…どした？」

ビクツとする悠太。

「しゃ…社会の教科書忘れた…」

半泣きの綾菜。

「あははははは！ 俺に任せろって！」

プツと噴出す悠太。

~~~~~悠太君にみつともないとこ みせちゃったなあ…

「先生、俺転校してきたばっかだから、教科書持ってません。」

羽鳥さんに見せてもらう訳にはいかないのです。ありがとうございます。」

う~~~~

「ほら、綾菜 一緒に見ようぜ。」

あああああ…綾菜！？ 呼び捨てで呼ばれちゃったよ…うっ…

顔赤くなってないかなあ？

なんでこんなにドキドキするんだろ。 心臓破裂しちゃうよお！

自分でも今になると

笑いがこみ上げてくるの。

恋の感情もわからないのか、って。

あの時の私に「バカ」って言ってやりたい気持ちになる。

それと同時に、

「今一分一秒を大切に。いつ人を失うかわからないんだよ」  
って忠告もしたい。

人の命ってどうしてあるんだろう？

何でそんなに簡単に消えてしまうのかなあ？

今でもナゾは残るばかり。

でもね、

死んでしまったら思い出はもう作れない。

死ぬ、ってそういう事だと思っ。

大好きな君が死んでしまっってから

私は…少し変わりました。

天国の君はわからないかも知れないけど…

思い出すたび私は泣いてる。

あの時は「幸せ」だったね、って心のそこから思ったんだ。

## 第二話・好きナ人（後書き）

こんにちは！！成宮春季です。

最後の言葉は、10年後の綾菜の言葉です。

10年後の綾菜は…23歳ですねえ。

凄い重い言葉だったんですが…。

何か意味があるんでしょうか？

そのところは、話が進んでいくとどんどんわかってきます。

では。

11月22日

作者\*成宮春季

### 第三話・初恋

「綾菜、好きな人居るでしょ。」

「へ？」

明菜はとうとう綾菜に質問した。

「それは…水嶋 悠太ね。」

由愛はコンピューターをいじりながら言った。

思いがけない二人の言葉に、顔が突然真っ赤になった。

「悠太を見ると、顔が赤くなったり、急に意識したり。

心臓が破裂しそうにない？」

不安そうに明菜は聞く。

「え…全て…その…」

もじもじしながら質問に答えようとする私。

「え？なんて？」

聞き返す明菜。

「あて…はまってるの…」



必死の思いで答えた。

「それは 恋ね。 悠太への。」

冷静沈着な由愛がカタカタパソコンを鳴らしながら言う。

「きゃー！ あたしだけの綾菜が！」

明菜は叫んだ。

\* \*

そんな青春って言葉が似合う日々を続けていたね。

私は由愛ちゃんも明菜ちゃんも

悠太君も

大好きでした。

どこで間違っただろうか。

思い返してもわからないけど

私が君と出会わなければよかった

そうとしか思えないんだ。

そうしたら私はもっと違う道を歩んで

君も生きていたかもしれない

ぐちゃぐちゃになった私の心は

違う方向に進んで行く事になるから。

親友

恋人

もし、あの子が死んでいたら

って思う事、ある？

私は

大切な”君”が死んでから

私は…

私は

大きく変わりました。

君が居なかったらもっと幸せだったのかどうか

自分でもわからないけど

私は

君が居て

みんなが居た

あの頃が一番

とてもとても幸せでした。

### 第三話・初恋（後書き）

こんにちわ。成宮春季です。

10年後の綾菜が、多分頻繁に出てきます。

そのほうが綾菜の心情が伝わりやすいかな？なんて。

”君”って言うのは、性別も親友なのかどうか、

今現在ストーリーに出てきているのか

どうかもわからない謎の人物です。

今”君”を特定するのは難しいかも^^；

まあ、最後までお楽しみください\*

11.22

作者\*成宮春季

## 第四話・シカク

「そ…そんなことないよ！」

綾菜は先ほどの明菜の言葉を全力で否定した。

「そそそそれは、一回も男の子に名前と呼ばれたこと無いからだよッ！」

「勇氣には呼ばれてたじゃない。」

綾菜の言葉に呆れる明菜。

勇氣

山月勇氣やまつきゆうき

綾菜の幼なじみであり、お隣さん。

勇氣は違う学校に通っている。

勇氣は綾菜のことが好きなのだが、綾菜はそれを知らない。

「そりゃ、勇氣は幼なじみだからッ…」

「じゃあ 欄君は？」

ニヤリと聞く由愛。

欄

佐藤欄さとうりょう

綾菜とピアノ教室に通っていた男の子。

すっごくモテていて、冷静な男の子。

綾菜のことだけ呼び捨てにする。

綾菜に対して敬語はなく、素直に話す。

「欄くんもだよッ！ 欄君は、あ…」

綾菜は言葉を詰まらせる。

「私のデータによると 佐藤 欄は初めて会ったときから綾菜の」  
トを呼び捨て、敬語無しで素直だったと書いてあるわ。」

由愛はパソコンをカタカタとならしながら言う。

「でででででででででででででで…でも！」

「はっきりと認めなさい！ 初恋を。」

明菜はビシッと言った。

「あ…ゴメン！」

綾菜は飛び出す。

真っ赤になって階段を駆け下りる。

明菜と由愛の言葉を振り切るように、全力で。

「きゃあああああああああああ

！」

綾菜は叫ぶ。

階段を踏み外したのだ。

「ちょ…ええええええ!?!」

男の子は叫んでいる。

ボスツ…

男の子は綾菜を抱えた。

「大丈夫か!? 綾菜!?!」

それは、水嶋悠太だった。

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ…悠太くん!?!

「大丈夫か!? おい? 綾菜??!」

「だだだ…だいじょうぶ…!」

「大丈夫じゃなさそうな声してるぞ!?!あ、ひどすぎむいてる。保健室に行こうか?」



~~~~~!

オヒメさま抱っこだよ!

うううううう…

心臓破裂しそう!

綾菜の顔は先ほどよりも赤く火照っていた。

\* \*

「これでよし! 綾菜、本当に大丈夫か?」

「うん…悠太くんありがとう。」

「お大事にな!」

\* \*

教室に入ると、明菜と由愛が駆けてきた。

「大丈夫? 綾菜??」

明菜と由愛が一斉に言う。

「大丈夫だよ…明菜ちゃん、由愛ちゃん…」

「何? 綾菜?」

二人ハモって言う。

「私……………悠太くんのコト好きみたい。」

そこからメロディーが奏でる。

初恋の……………甘いうた。

#### 第四話・シカク（後書き）

実は…微妙に脇役っぽくなってる佐藤欄なんですが…

結構本編に関わってくるんです^^

欄は書きやすくてお気に入りなんです

よかったら欄にも注目してみてくださいね\*

1 1 . 2 3

作者\* 成宮春季

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5439f/>

---

恋の詩 第四小節三番

2010年12月7日02時42分発行